

3-13.2022–2023 年に九州南部から琉球列島にかけて実施された調査に基づき発見された新顔の魚類

本村 浩之

New species and newly recorded species of fishes discovered from field surveys in southern Kyushu and the Ryukyu Islands during 2022–2023

MOTOMURA Hiroyuki

鹿児島大学総合研究博物館

The Kagoshima University Museum

はじめに

南日本の魚類多様性を把握し、各海域の魚類相の特徴を理解することを目的として、2022年4月から2023年12月にかけて毎月2–3回のペースで九州南部(八代海南部から甑島列島、鹿児島県本土、宮崎県南部)から琉球列島にかけての魚類採集調査を実施した。フィールド調査と並行して、同期間中に採集された魚類、ならびに鹿児島大学総合研究博物館を中心に国内外の大学や博物館に所蔵されている魚類標本を調査した。調査・研究の成果の多くは現在解析中であるが、上記2年の期間中に104論文を出版した。これらの論文は調査した魚類標本を中心に(あるいは比較標本として)、属の再定義や種の再記載、学名の整理、識別形質の再検討、種間の遺伝的類縁関係の解明などの分類学的研究や生物地理に関する新知見に関する内容である。本報告では、これらのうち、九州南部～琉球列島から採集された魚類標本に基づき記載された新種や日本初記録種を紹介する。

2022–2023 年度に九州南部～琉球列島から新種記載した魚類

2022年4月から2023年12月にかけて、九州南部～琉球列島から以下の8新種を記載した。紹介順(科の配列)は本村(2023)にしたがった。

エソ科の *Saurida fortis* Furuhashi, Russell and Motomura, 2022 (図1) は、標準体長 50 cm に達する大型魚で、41 標本に基づき新種として記載された。奄美大島をタイプ産地とし、同島から南シナ海にかけて分布する。本種の特徴的な体色から、奄美大島の伝統工芸品、大島紬の製作過程のひとつである泥染めに因み、ドロゾメエソと命名された。

ヨウジウオ科の *Urocampus yaeyamaensis* Araki, Shibukawa and Motomura, 2022 は、標準体長 7 cm 以下の小型種で、八重山諸島から得られた 74 標本に基づいて新種として記載された。本種はこれまでミナミオクヨウジ *Urocampus carinirostris* Castelnau, 1872 とされていたが、本研究で真の *U. carinirostris* がオーストラリア南東部の固有種であることが明らかになり、ミナミオクヨウジの学名は *U. yaeyamaensis* となった。本種は八重山諸島の固有種で、水深 1 m 以浅の藻場に多く生息する。

フサカサゴ科の *Neomerinthe ignea* Matsumoto, Muto and Motomura, 2023 は、相模湾をタイプ産地として、日本からニューカレドニアにかけての西太平洋から新種として記載された。国内では千葉県、神奈川県、和歌山県、高知県、大分県、鹿児島県、沖縄県から標本が得られた。鹿児島県内では現在のところ、馬毛島沖からの1標本が本種の唯一の記録。本種はこれまで同属のヤブサメカサゴ *Neomerinthe erostris* (Alcock, 1896) と混同されていたが、インド・太平洋広域から得られた *N. erostris* と同定されていた標本を調査した結果、新種 *N. ignea* の存在が明らかになった。本種の新標準和名としてホムラカサゴが提唱された。

アゴアマダイ科の *Opistognathus ctenion* Fujiwara, Motomura and Shinohara, 2023 は、標準体長 3 cm ほどの小型種で、馬毛島をタイプ産地として3標本に基づき新種として記載された。本種の体側にみられる白斑に因み、シラタマアゴアマダイと命名された。

ベラ科の *Pteragogus turdus* Iino and Motomura, 2022 は、東インド洋と西太平洋から得られた 65 標本に基づき新種として記載された。従来インド・太平洋広域に分布すると考えられてい

た *Pteragogus cryptus* Randall, 1981 を再検討したところ、西インド洋と東インド洋+西太平洋の個体群間に種レベルの相違があることが明らかになり、西インド洋の種にはタイプ産地が紅海の *P. cryptus* を適用、東インド洋+西太平洋の種は新種であることが判明した。本新種は同属のキツネオハグロベラに近縁であるため、タヌキオハグロベラと名付けられた。

ヘビギンボ科の *Enneapterygius olivaceus* Dewa, Tashiro and Motomura, 2023 は、与論島をタイプ産地とし、琉球列島とフィリピンから採集された 28 標本に基づき新種として記載された。最大 2.5 cm の小型種で、雌雄で色彩が異なる。雄の婚姻色からウグイスヘビギンボと命名された。

ハゼ科の *Luciogobius punctilineatus* Koreeda and Motomura, 2022 は阿久根市をタイプ産地とし、鹿児島県本土、甌島列島、種子島、および屋久島から採集された 21 標本に基づき新種として記載された。淡水の湧水がある海岸転石の間に生息する。シラスイミミズハゼと命名された。さらに、同属の *Luciogobius griseus* Koreeda, Maeda and Motomura, 2023 も奄美大島をタイプ産地とし、屋久島～沖縄島から採集された 40 標本に基づき新種として記載、スミゾメヤリミズハゼと命名された。近縁種のヤリミズハゼ *Luciogobius platycephalus* Shiogaki and Dotsu, 1976 は日本本土と種子島に分布しており、両種は種子島と屋久島の間に位置する生物地理境界線（大隅線；Motomura and Matsunuma, 2022）を境にすみ分けていると考えられる。

2022–2023 年度に新標準和名を命名した魚類

2022 年 4 月から 2023 年 12 月にかけて、九州南部～琉球列島から得られた和名が無い 11 種に（多くが日本未記録種であった；上記の新種を除く）、チャイロウツボ（薩摩半島西岸）、ナンヨウオキアナゴ（三島村黒島沖）、ピエロカエルアンコウ（屋久島、沖縄島）、シンカイスミツキョウジ（甌島列島）、イチゴイソカサゴ（与論島、沖縄島）、バナナアゴアマダイ（鹿児島湾）、オオメアゴアマダイ（種子島）、オオアカムツ（大隅諸島）、スバルヘビギンボ（伊豆諸島、宇治群島、大隅諸島、琉球列島）、ヨリメダルマガレイ（沖縄島）、およびキバヨリメダルマガレイ（沖縄島）という新しい標準和名を付けた。



図 1 奄美大島沖から採集されたドロゾメエソ *Saurida fortis* Furuhashi, Russell and Motomura, 2022。標準体長 38 cm のホロタイプ（鹿児島大学総合研究博物館所蔵）。

引用文献

- 本村浩之. (2023) 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 23. <https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/jaf.html>
Motomura, H. and M. Matsunuma. (2022) Fish diversity along the Kuroshio Current, pp. 63-78. In Kai, Y., H. Motomura and K. Matsuura (eds.) Fish diversity of Japan: evolution, zoogeography, and conservation. Springer Nature Singapore Pte Ltd., Singapore.